

旧石器時代から縄文時代へ

旧石器時代から、縄文時代への移行、移り変わりについて。

・旧石器時代と縄文時代の境界

あくまで現代の我々の評価。しかし割と多数の研究者の意見が一致。

* 土器（縄文土器）の出現を重視することが多い。旧石器時代的な生活から縄文時代的な生活への変化と深く関係するから。

旧石器時代：小規模な集団が移動を繰り返す。フォレジャー的な生活。

非常に平等な社会。使う道具は持って歩くか現地調達。なので極力少なく抑えようとする。

縄文時代は？

土器を紹介。ごてごてと装飾。煮炊きにも使う。持ち運ぶのは大変、適していない。一方、持ち運びしやすいようなものもあるので、高い技術があったと考えられる。

ということで、

縄文時代：定住的な狩猟・採集民。竪穴住居からなる集落の形成。コレクター的な生活。ある一箇所のところに長くすみ、分かれて色々な地域に散って食料を集める。食料を溜め込むことも行っている。

ただし、ある日突然こう変化したわけではない。徐々になっていったということは当然のことである。こういう生活の中で生まれていったのが土器であり、それはこの生活の背景を映し出しているのではないか、ということ。

・最古の土器（縄文土器）はどのようなものか？

* 山内清男（やまのうち すがお）の研究

縄文土器の地域差・年代差の研究。細かく分析→編年研究。

縄文時代は暦がないので、記録できない。そういう時代を先史時代という。先史時代を紐解くときは、こういう土器みたいなものを細かく分析して編年するのが必須らしい。

→最古の縄文土器に対する関心が高まる。「縄文土器の底」と表現。「縄文土器の底が見てみたい」なんて発言。

「縄文土器の底」の研究

・1930年ごろまでは田戸下層式土器が最古とされる。

→朝鮮半島のふし目文土器に類似するため。

- ・1950年代までは撚糸文土器が最古と考えられる。田戸下層式よりも下の層から出土。
 - * 横須賀市 夏島貝塚のカキを放射性炭素年代測定。9450±400年。世界最古とされる。(はじめは信憑性を疑われたが精度が上がり、認められるようになる。)
 - ・1955年に山形県 日向洞窟遺跡の発掘
 - ・1956年に新潟県 本ノ木遺跡の発掘
 - ・1960年に長崎県 福井洞窟遺跡の発掘
- 撚糸文土器より古そうな土器が出土し始める。隆線文土器・押圧縄文土器(製作技術としては非常に高い。薄さがかなり薄く、作るのは難しいらしい。)
- * 福井洞窟遺跡の放射性炭素年代測定。12700±500年という測定値。
 - ・1970年代後半から、より古そうな土器が出土。
- 青森県 大平山元 I 遺跡、神奈川県 上野遺跡、鹿児島県 加治屋園遺跡、横井竹の山遺跡など。
- 土器の出現年代は1万数千年前に遡る可能性。「縄文土器の底」か？

- ・東アジア各地で同じくらいの古さの土器が見つかり始める。
- ロシア共和国 ガーシャ遺跡、ウスチノフカ遺跡
中国 仙人洞遺跡、彭頭山遺跡など。
- 1万数千年前に東アジアの広い範囲で土器を使い始めたことがわかる。

東アジアにおける土器出現の背景

- ・1万数千年前に東アジアで土器が出現する背景
- この時期は大きな気候の変動期にあたっている。
- グリーンランド氷床の酸素同位体比を調べると、12700-10800年の間に間期なのに大きな気温上昇が一瞬だけ起きて、また寒くなっている。これに土器出現の時期が一致する。
- 世界各地で人々の生活に大きな変化が生じた。

EX) 中東地域のナトゥーフ文化

- 世界最古の定住的な集落が出現した。植物質の食料への依存度が高まる。
 - 東西アジアで初源的な農耕・牧畜が行われ始める。
 - ・背景にある自然環境の変化
- 世界各地に広がった新人が急激な自然環境の変化に対応して、生活を変化させていった。

日本列島における土器出現の背景

- ・自然環境の変化
- 動物相の変化 大型獣の減少・絶滅。日本列島は島国なので、気候の変化によっては致命傷になる。逃げられないから。大陸なら北方・南方に逃げられるのに。

照葉樹林・暖温帯落葉広葉樹の拡大

河川や海岸環境の変化 暖かい海流が日本海に流れ込むようになり日本海の海水温度が上がる。上がると、暖かい海水から多くの水が蒸発して雲を形成。日本列島の山岳に当たると大きく雨や雪を降らす(冬)。一方太平洋でもそう(夏)。豊富な雨は川へと流れ豊かな水量を持つ河川が多くなる。

・生活の変化

旧石器時代を通じて人口の緩やかな増加。

→狩猟を中心とした生活に変化が生じる。

旧石器時代初期には、環状ブロックのような労働投下を行って大きな施設を作ることもあったが、後期には小さな集団が増える。大きな獣が減ってゆく。それに従って、だんだん中型・小型の獣をとるような生活に変化する。そうになると、弓矢を使った中・小型獣の狩猟が中心となる。昔のように槍を使った猟のやり方は薄れ、もっとすばやく攻撃できるように、弓矢が出現する。中・小型は動きがすばやいので、槍でつくのは無理なもの。

→拡大した森林資源の積極的利用へ。

ドングリなどの木の実の利用

アクを抜き、消化を良くするための煮沸具

土器の出現へ。

*定住的な生活へと移行する。竪穴住居の普及。

煮沸具として出現するのが土器なのではないかっていうお話。

その拡大してきた森林、そこにはドングリのような木の実が結構な量取れていた。主要な栄養素が多く含まれているものが、つまりでんぷん質のカロリー源になるものが多かった。ドングリってのは、生では固くて食べれない。焼いても渋くて食べれない。タンニンという物質が原因。うまく取らないと食べれない。一番簡単なのが、煮てしまうこと。当時の樞は渋みが強かったのでちゃんと取り除けないとだめ。そのために、煮沸具として土器が出現したのではないかという話。身の回りの森林資源、推量が豊富になった河川や保水、広がりつつあった海など、いろんな環境を効率よく利用する生活へと変化していった。